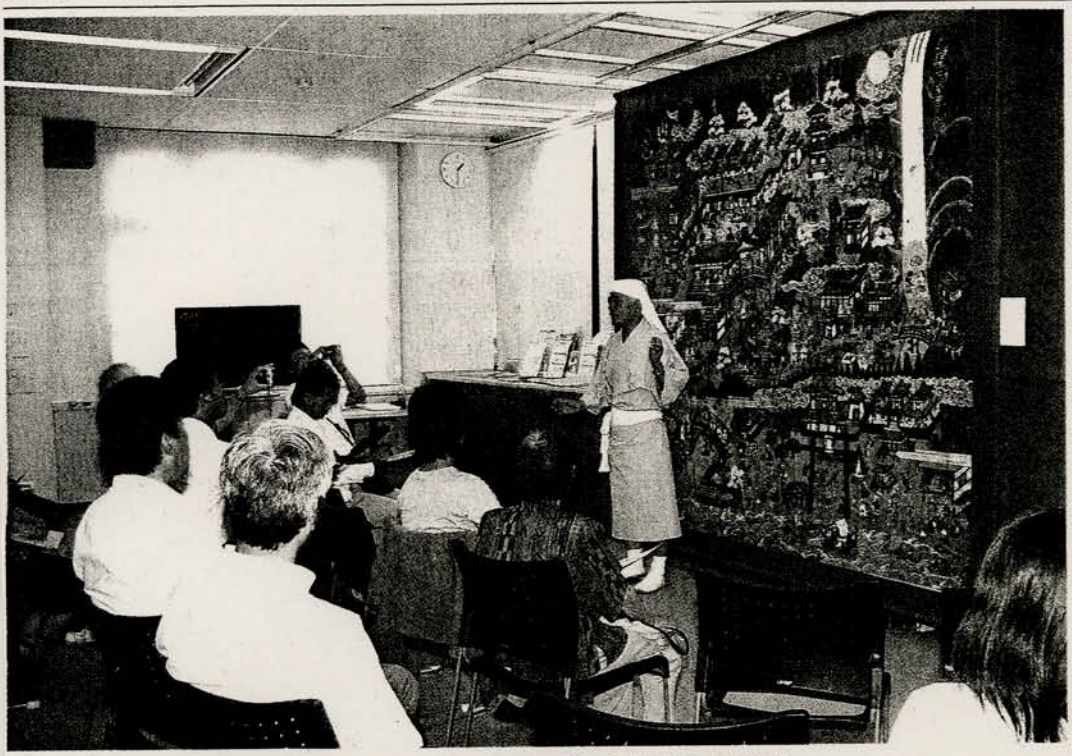
世界遺産週間イベント

世界遺産マスター「熊野曼荼羅絵解き」

比丘尼に扮し、参詣道を辿る

今月7日で「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産登録なって3周年。この記念行事として和歌山県では2日から7日まで、世界遺産センター（田辺市本宮行政局内）で熊野曼荼羅絵解きやウオーキング用の杖づくり、またコンサートとセミナーを開催。このほか、有田と那賀両振興局でもセミナーを開く。

同センターでは「和歌山県世界遺産週間（1日～7日）」中の2日、世界遺産マスターの若林春次さんによる「熊野曼荼羅絵解き」が行われた。熊野比丘尼（びくに）が持ち歩いた参詣曼荼羅で、お参りの作法と〝あの世〟へ行く道すじをあらわしたもの。比丘尼に扮（ふん）した若林さんは、絵図の参詣道を辿（たど）りながら各場面を解説していった。



熊野比丘尼に扮して参詣曼荼羅の絵解き

若林さんは、絵解きに入る前に参詣曼荼羅について話した。その中で、比丘尼の功績にもふれ、「浄財を集めるとともに、熊野神社の勧請（かんじょう）の礎（いしずえ）を築いた」ことと、熊野に親しみを持たせ、大勢の人が参詣した〝蟻（あり）の熊野詣（くまのもうで）〟を現出させたことを挙げた。比丘尼の〝絵解き〟を聞いた人は、曼荼羅に仏像、神像が描かれてなくても心象風景的にそれぞれのイメージを創り上げたという解釈も述べた。

鎌倉時代の作という参詣曼荼羅の絵解きは「川関の関」から始め、ところどころに有名人の和泉式部（歌人）、平維盛（武将）、花山法皇を配した絵図の意味を分かりやすく語った。若林さんは「あまり有名人を強調すると、庶民が参り辛くなります。それでところどころに配置し、庶民でも有名人と一緒に参れるということを強調したのです。それで〝蟻の熊野詣〟になったのですが、これは比丘尼の手腕です」と語った。また数か所に描かれている〝みそぎ〟について、「身も心もきれいにして神に参ることと、水の霊力をもらう」という意味があることを話した。

このセミナーのほか、同センターの記念イベントは3日が杖作り体験、6日が発心門王子～熊野本宮大社までの〝熊野で健康ウオーキング〟、7日が「癒やしのコンサートwith佐野安佳里&世界遺産セミナー」。

「癒やしのコンサート」は午後1時から開演し、2時からセミナー「世界遺産の魅力～祈りの道と文化的景観」、このあと3時45分から餅（もち）まきとなっている。問い合わせは同センター（電話0735㊷1044、FAX0735㊷1560）へ。

平成19年7月4日付
紀南新聞